

企画・制作/中日新聞広告局

若い人も要注意! その股関節の痛み、もしかして…

脚の付け根の「股関節」の痛みには、さまざまな原因がありますが、「特発性大腿骨頭壊死症」という聞きなれない病気が原因となる場合があり、若い人もかかるため注意が必要です。その適切な対応について、藤田医科大学病院の森田充浩先生にお聞きしました。

脚の付け根にある「股関節」は、大腿骨の「大腿骨頭(たいことう)」という球状の骨が、骨盤側の受け皿となる寛骨臼(かんこつきゅう)にはまり込むことで安定し、脚を自在に動かしています。股関節の動きが損なわれる病気が高齢者特有と思われるがちですが、実は30、40代が多く発症する「特発性大腿骨頭壊死症」という病気があります。これは原因不明の血流障害により大腿骨頭が壊死、陥没していくもので、全くの原因不明の場合もあるものの、アルコール過剰摂取や自己免疫疾患の治療等で用いるステロイド剤が引き金となっており、早ければ20代で発症することもあります。主な症状は「股関節の痛み」ですが、腰の痛みや坐骨神経痛でも似た症状がでるので、確定診断のためには検査が不可欠。特に特発性大腿骨頭壊死症の初期はMRIによる早期診断が重要です。

治療は、壊死の範囲が狭く、ステロイド剤やアルコールとの関連が疑われる場合は、その対応を優先して経過を観察。併せて骨を守る骨粗しょう症の薬の服用、脚への負担を軽減する杖の使用など保存療法で改善を図ります。それでも痛みが続き、壊死範囲が広く進行した場合は外科的治療となります。壊死範囲が限局的で骨の状態が良い人には、大腿骨の一部を切って回転矯正する「大腿骨頭回転骨切り術」が選択肢となります。自分の関節を残せるのがメリットですが、入院とリハビリテーションに半年近くを要し、一定期間の免荷歩行が必要です。一方、壊死が広範囲か、比較的高齢の方に對しては、損傷した股関節を人工に置き換える「人工股関節置換術」が選択肢となります。こちらは術後の回復も早く、種々のスポーツを楽しめる方もいます。近年は人工股関節の耐久性が飛躍的に向上し、若い方や早く社会復帰したい患者さんにも選択されています。また、術式も太ももの皮膚線条に沿って(ヒキニ皮切)前方から(筋肉を切らずに)アプローチする低侵襲手術を用いれば、術後合併症である脱臼がほぼ皆無となり、外観上の傷も目立ちません。このように劇的な進歩を遂げた「人工股関節置換術」の恩恵を受けていただけでなく、股関節の痛みを侮らず、早期に整形外科専門医に受診していただくことをお勧めいたします。



藤田医科大学病院
整形外科 准教授

森田 充浩先生

関節の痛み・股関節の痛みで悩んでいる全ての皆さまへ

関節が痛いドットコム

検索

人工関節と関節痛の
情報サイトです。

<https://www.kansetsu-itai.com/>